新しい学問・医学への貢献

1　目　標

（1）　厳しい差別の中で優れた技術を身につけていた被差別民の存在に気づく。

（2）　被差別民のもつ優れた技術や知識が、近代医学につながっていったことを理解する。

2　展　開

主な学習活動	留意点
1　解剖台の写真を見て、これが何の写真か考える。	○資料１　大理石の解剖台（巻末資料16） 写真の説明とともに、江戸時代に現在の医学につながる功績が残されたことを説明する。 ○現在の医学につながる大きな功績をもたらした場面を再現すると伝える。
2　腑分けロールプレイを行う。 玄白・老屠・仲間医者の役割を演じる。	○資料２　ロールプレイ台詞(P114) ○ロールプレイを見て、会話や登場人物の役割をしっかり把握するように促す。
3　グループで下記の疑問について考える。 (1)なぜ杉田玄白たちは、直接腑分けをしなかったのだろうか。 (2)腑分けを行った人物はどのような人だろうか。 (3)この人物は、腑分けの技術や内臓の正確な知識をどこで獲得したのだろうか。	○それぞれの設問に対して、各グループで意見をまとめさせる。 （ブレーンストーミングでやってもよい）
4　腑分けの歴史的な意義と、当時の医者の意識、差別されながらも優れた技術と知識を獲得していた被差別民の存在を理解する。	○資料３　２つの人体解剖図(P12) ○「老屠」の存在がなければ、解体新書は成立しなかったことと、当時の医者は「ケガレ」観にとらわれ、人体構造の正確な把握ができていなかったことを説明する。
・「腑分けの一説」の文を読み、玄白がどう評価していたか知る。	○資料４　腑分けの一説(P115)
5　多くの腑分けに被差別民が関わっていたことを理解する。	○資料５　腑分けの実施記録表(P116) この腑分け以外にも腑分けが行われ、被差別民の関わりが、医学の発展につながったことを説明する。 ○資料６　旧東京医学校(P115)（巻末資料17） 医学に関わった被差別民の存在に触れる。
6　本時の学びを通して、考えたこと、気づいたことを振り返りシートに記入する。	○振り返りシートの配布。

資料２　ロールプレイ台詞

玄白：それでは腑分けを開始いたします。（片手に「東医宝鑑」を持つ）

老屠：それでは。　（メスを動かす動作をする。他の者は書籍と作業を交互に見つめる。）

医師１：それは何か？（内臓の部分を指さす。片手に「ターヘルアナトミア」を持つ）

老屠：心の臓でございます。

医師２：その奥にあるのは何か？（内臓の部分を指さす。）

老屠：肝の臓でございます。

玄白：漢方の人体内図と大きく異なるが、日本人と中国人とでは人体の構造が異なるのか？

老屠：同じでございます。こちらの方が正確でございます。（「ターヘルアナトミア」を指さす）

※ここでは「東医宝鑑」を中国漢方がイメージしやすいことから、中国人と結びつけているが、「東医宝鑑」は朝鮮漢方の医学書である。

※小道具として持つ「東医宝鑑」や「ターヘルアナトミア」を用意しておく。

回向院　腑分け記念碑(東京都)

資料４　腑分けの一説

これより各と打連れ立ちて骨ケ原の設け置きし観臓の場へ至れり。さて、腑分のことは、えたの虎松といへるもの、このことに巧者のよしにて、かねて約し置きしよし。この日もその者に刀を下さすべしと定めたるに、その日、その者俄かに病気のよしにて、その祖父なりといふ老屠、齢九十歳なりといへる者、代りとして出でたり。健かなる老者なりき。彼奴は、若きより腑分は度々手にかけ、数人を解きたりと語りぬ。その日より前迄の腑分といへるは、えたに任せ、彼が某所をさして肺なりと教へ、これは肝なり、腎なりと切り分け示せりとなり。それを行き視し人々看過して帰り、われわれは直に内景を見究めしなどいひしまでのことにてありしとなり。もとより臓腑にその名の書き記しあるものならねば、屠者の指し示すを視て落着せしこと、その頃までのならひなるよしなり。その日もかの老屠がかれのこれのと指し示し、心、肝、胆、胃の外にその名のなきものをさして、名は知らねども、おのれ若きより数人を手にかけ解き分けしに、何れの腹内を見でもこゝにかやうの物あり、かしこにこの物ありと示し見せたり。図によりて考ふれば、後に分明を得し動血脈の二幹また小腎などにてありたり。老屠また曰く、只今まで腑分のたびにその医師がたに品々をさし示したれども、誰一人某は何、此は何々なりと疑はれ候御方もなかりしといへり。良沢と相ともに携へ行きし和蘭図に照らし合せ見しに、一としてその図に聊か違ふことなき品々なり。古来医経に説きたるところの、肺の六葉両耳、肝の左三葉右四葉などいへる分ちもなく、腸胃の位置形状も大いに古説と異なり。官医岡田養仙老、藤本立泉老などはその頃まで七八度も腑分し給ひしよしなれども、みな予古の説と違ひしゆゑ、毎度毎度疑惑して不審開けず。その度々異状と見えしものを写し置かれ、つらつら思へば華夷人物違ひありやなど著述せられし書を見たることもありしは、これがためなるべし。さて、その日の解剖こと終り、とてものことに骨骸の形をも見るべしと、刑場に野ざらしになりし骨どもを拾ひとりて、かずかず見しに、これまた旧説とは相違にして、たゞ和蘭図に差へるところなきに、みな人驚嘆せるのみなり。

杉田玄白著　緒方富雄校註　「蘭学事始」　1959　岩波書店

現代語訳

それから、みなうちそろって、骨が原の用意されてある腑分け見学の場所へ行った。さて、腑分けのことは、穢多の虎松というものが、このことに巧みであるということで、あらかじめ約束しておいたということである。この日も、そのものに執刀させようと決めておいたのであるが、当日、そのものが急に病気になったというので、その祖父だという老人で、年齢が 90 歳であるというものが、代わりに出向いていた。元気な老人であった。この人は、「若いときから腑分けはたびたび手がけて、すでに数人を腑分けしたことがある」と語った。これまでの腑分けというのは、このような人にまかせて、その人がそれぞれの部分を指して、肺であると教えたり、これは肝臓である、腎臓であると切り分けて示していったものであった。それを見に行った人びとは、ただそれを見ただけで帰って、「われわれはじかに内臓を見きわめてきた」などといっていたまでのことであったという。もともと内臓にその名称が書きしるしてあるわけではないから、腑分けをするひとが指し示すのをみて、わかったということで、これがそのころまでのならわしであったということである。その日も、その老人が、あれやこれやと指し示しては、心臓・肝臓・胆臓・胃のほかに、名称のついていないものをさして、「名称は知らないけれども、自分は若いときから数体を手がけて腑分けしているが、いずれの腹内を見ても、ここにこのような物があり、あそこにこのような物がある」と示して見せてくれた。これを図によって照らし合わせて考えてみると、後で明確になった「動血脈(動・静脈)」の二本の血管の幹や、また「小腎(副腎)」であった。老人がまたいうには、「今まで腑分けのたびに、見学の医師のかたがたにこれらの内臓を指し示してきたのであるが、だれ一人として、それは何、これは何といって、疑問にされたおかたもなかった」といった。良沢といっしょに、持っていたオランダ解剖図と照らし合わせてみたところ、ひとつとして、その図と少しも違っていることのないものばかりであった。古来の医学書に説明している肺の六葉両耳とか、肝臓の左三葉右四葉などという区別もなく、腸や胃の位置や形状も古説とは大いにちがっている。官医の岡田養仙老、藤本立泉老などは、そのころまで7，8度も腑分けをされたということであるが、みな大むかしの説と違っていたので、いつもいつも疑問に思って、不審の点は解けなかった。そのつど異常と思われたものを写しておかれた。「つくづく思うに、中国人と西洋人とでは人体に違いがあるのであろうか」などと著述された書物を見たこともあったのは、きっとこのためであろう。さて、その日の解剖を終わって、いっそのこと骨の形をも見ておこうと、刑場に野ざらしになっている骨などを拾い取って、いろいろしらべてみたところ、これらもまた、いままでの説とはちがっていて、どれもオランダの図とはちがっているところのないことを知って、みんな驚嘆するばかりであった。

杉田玄白著・緒方富雄訳注　「蘭学事始」　2000　講談社学術文庫

トピック：自らの手で腑分けを行った医師

穢多の虎松の祖父が骨ケ原で腑分けを行うより、1年早い明和7(1770)年、河口信任(古河藩藩医)が屍体を京都郊外で解剖している。河口が屍体の解剖を決心したのは、中国の医書「霊枢」に「解剖」の文字を見つけたことと、ヨーロッパの「夷図」との出会いによる。師の反対に対して河口は、「一屍体ヲ解カンカ、以ッテ千万人ヲ治術スルノ裨益アラン」と、医学上の意義を述べ解剖を実行している。当時多くの医師は、ケガレ観にとらわれ、自ら屍体に触れ解剖しようとしなかったが、ケガレ観にとらわれず、解剖をすることが多くの人々を救うことになると信じ、人体の構造を理解しようとした医師がいたのである。

【参考】杉本つとむ　「中国医術と西洋医術―解剖事始」　『週刊朝日百科 75 日本の歴史 近世Ⅱ-5 本草の世界と鉱山町』　2003　朝日新聞社

資料５　江戸時代の腑分けの実施記録

西　暦	腑分け関係者名	場　所	特　記　事　項
１７５４	**山脇東洋**		**「臓志」作成**
１７５８	栗山考庵・熊野玄宿	山口　萩	男刑屍体の腑分け
１７７０	**河口信任**	京　都	京都郊外で腑分け
１７７１	**杉田玄白・前野良沢**ら	江戸千住	女刑屍体の腑分け（小塚原刑場）
１７７４	**杉田玄白・前野良沢**ら	江　戸	**「解体新書」作成**
１７７５	**山脇東洋**	京　都	女人内景真図作成
１７７６	**山脇東洋**	京　都	男人内景真図作成
１７９７	柚木太淳	京　都	女刑・男刑屍体の腑分け
１８００	大矢尚斎・各務文献	大　坂	**尿管と膀胱の実験** （腑分けによる、初の内蔵に関する実験）
１８０８	小森桃塢	京　都	**「解臓図賦」作成**
注：実際に行われた腑分けは、このほかにもあるが、代表的な人物が行ったものや、特記すべき事項のある腑分けのみをここでは掲載した。			

松永俊夫　「解剖と被差別部落民―医学史に見る近代解剖の欠落」　明日を拓く　N019　1997　東日本部落解放研究所 をもとに作成

資料６　旧東京医学校（巻末資料 17 にカラー掲載）

旧東京医学校(東京大学医学部の前身明治９年建築)には、江戸の町の穢多頭であった弾左衛門配下の者たちが、患者の世話や食事面で関わっていた。弾左衛門は、戊辰戦争で傷ついた幕府軍の負傷兵を治療した「海陸軍病院」の建設費用を献金するとともに、配下の者を食事の準備や看護のために派遣している。

上杉　聰　「部落史がかわる」　1997　三一書房